内閣府青年国際交流事業
事後活動ニュース

FY 2019

内閣府

内閣府青年国際交流事業はあなたの飛躍を応援します！

目 次

【IYEO会員個人の活動】
3　国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）小宮理奈さん
4　一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）辰野まどかさん
5　ASEAN+3 ユース・デジタル・ビジネス・サミット2019
7　ASEAN+3 ヤング・リーダーズ・プログラム / 共生社会国際会議
8　日中友好大学生訪中団
【IYEO会員グループの活動】
9　IYEOパラスポーツ振興チーム
10　コレヲキニ
11　See You Soon Project
12　One More Child Goes To School Project
【IYEOの活動】
13　都道府県IYEOの活動（北海道IYEO）
14　都道府県IYEOの活動（宮城IYEO）東日本大震災復興支援活動
15　都道府県IYEOの活動（岐阜県IYEO）
　SDGsで見える!!　世界の未来・じぶん未来・ぎふ未来
16　内閣府青年国際交流事業地方プログラム
17　青少年国際交流事業事後活動推進大会（全国大会京都大会）
18　SIGAブルネイ／ SWYAA国際大会ロシア
19　中国派遣団同窓会／日韓交流連絡会議

内閣府青年国際交流事業

事後活動について

1. 事後活動とは

内閣府青年国際交流事業に参加した青年（既参加青年）には、事業に参加して得た経験をその場限りのものとせず、事業参加後の活動に結びつけ、広げていくことが期待されています。実際に、多くの既参加青年たちが、事業参加後もその属する地域や職域など社会の各分野において、事業参加によって得た知識や経験、人脈をいかして、国際交流活動や青少年育成活動などの社会貢献活動に取り組んでいます。内閣府では、事業で得た学びを広く地域社会や国際社会に還元することを目的にした社会貢献活動を「事後活動」と呼び、既参加青年の活動を支援しています。

2. 事後活動を支える日本青年国際交流機構（IYEO）と世界的な人的ネットワーク

日本青年国際交流機構（IYEO：International Youth Exchange Organization of Japan）は、この「事後活動」に取り組む既参加青年の全国的組織として、1985年に設立されました。2019年度は「社会でリーダーシップを発揮できる人材育成を目指して」をその活動方針とし、47都道府県に支部を置きながら地域に根差した国際交流活動や青少年育成活動、大規模災害への支援など、その豊富な人材とネットワークを駆使して、様々な活動に継続的に取り組んでいます。

また、海外においても、40を超える国々で外国人参加青年の事後活動組織が設立され、各国独自の社会貢献活動が行われています。こうした事後活動を支えるネットワークの下、既参加青年は、同じ関心を持った青年と世代、地域、国を超えてつながることができるほか、熱意やアイデア次第で取り組みたい活動をすることができます。

なお、これら事後活動組織による活動はもちろんのこと、既参加青年一人一人が自身の社会活動などにおいて、事業参加によって得たものをそれぞれのやり方で社会に還元することもまた「事後活動」です。

3. 内閣府青年国際交流事業　事後活動ニュースFY2019

本事後活動ニュースFY2019は、既参加青年が各々の住む地域や職域等で取り組んだ事後活動の一部を主に紹介するものです。

（1）IYEO会員個人の活動

本事業の参加によって得られた経験や学びを自身のキャリア形成にいかし、現在、国際協力活動やビジネスの第一線で活躍している既参加青年を始め、各国政府や国際機関などの要請に基づき、IYEOの推薦により国際会議やフォーラムに参加した既参加青年たちを紹介します。

（2）IYEO会員グループの活動

IYEO会員は、各地域、職域、学校、青少年団体等で様々な活動を行っています。ここでは、IYEO会員が自主的にチームを結成し、東京オリンピック・パラリンピック競技大会や国際協力活動などの社会貢献活動をしている事例を紹介します。

（3）IYEOの活動

各都道府県IYEO独自の国際交流・地域貢献プログラムに加え、本事業に参加するために招へいされた外国青年向けの地方プログラム、定期的な集まりとして各地域での事後活動の進捗状況を報告・意見交換を行い、国際交流活動を一般の方にも紹介する全国大会・ブロック大会（青少年国際交流を考える集い）の事例を紹介します。

また、約60年の長い歴史の中で培われた世界的な人的ネットワークとして、「東南アジア青年の船」事業事後活動組織（SSEAYP International）及び「世界青年の船」事業事後活動組織SWYAA（Ship for World Youth Alumni Association）の国際大会にIYEO代表者が参加した活動事例に加え、日本・中国青年親善交流事業及び日本・韓国青年親善交流事業の開催実績を紹介します。

【IYEO会員個人の活動】 国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）

仲間のアドバイスが進路の決め手に

現在、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）ダッカ事務所（バングラデシュ）で准保護官として難民支援に携わる小宮さんは、大学2年生のときに「世界青年の船」事業に参加。様々な国の参加者と友情を育む中で、国際協力の現場で働きたいと強く思ったと同時に「おそらく私は世界でも通用する」と感じ、自信をつけました。

大学を3年で卒業し、イギリスの大学院に進学します。この大学院を勧めてくれたのが「世界青年の船」で出会ったカナダの参加青年でした。その後、「世界青年の船」の同期の青年から、「国連職員を目指すのなら、登録したほうがいいメーリングリストがある」と教えられ、ユニセフのインターンのことを知りました。仲間のこの一言をきっかけに、ウガンダのユニセフ事務所でインターンをすることになりました。あのアドバイスがなければ、国連職員というキャリアを歩み始めることはなかったかもしれないと小宮さんは語ります。

准保護官　小宮理奈さん
第21回「世界青年の船」事業（2008年）

世界の縮図のような「世界青年の船」

「世界青年の船」事業では、異なる国籍、宗教、人種、価値観の200名以上の青年たちが、船という閉ざされた空間で1か月近く共に過ごします。この世界の縮図のような船を経験したことにより、小宮さんはいかに社会が不平等であるかを痛感することになります。小宮さんが参加した第21回の船には、現在も社会情勢に不安を抱えるイエメンやベネズエラの青年や、後発開発途上国と言われるバヌアツの青年が参加していました。世界の不平等について頭では分かっていたものの、自国の選挙結果を知ってベネズエラの青年が泣いているのを実際に見たり、慎ましい生活をしている島国の参加青年と行動を共にしたりしたことは、20歳の小宮さんにとって転機になりました。

また、関心のあったパレスチナ問題について参加青年とディスカッションしたことで、普段あまり考えることがなかったアイデンティティについても意識するようになりました。「イエメン出身の青年が、自分の国ではないパレスチナついて感情的になっていて驚いた」と当時を振り返る小宮さん。キャリアを難民支援の方向にシフトさせたのも、当時「世界青年の船」で感じたアイデンティティの問題と難民保護の間で大きな接点があると思ったからだそうです。

旅行や出張で世界各地を飛び回る小宮さんですが、渡航前には行く先々の国で既参加青年が近くにいないか探すそうです。これまでに、ロンドン、ブライトン、マドリッド、セビリア、プラハ、エルサレム、アンマン、ナイロビ、スリランカ、ペルーで会えたとのこと。

第21回「世界青年の船」事業参加者

仕事を続ける原動力

「難民問題は、自分とは異なるバックグラウンドの人々を人間としてどう受け入れるのかという問いです」と話す小宮さん。時には砂埃にまみれながら、水も電気もない現場で働くことを余儀なくされるハードな職場ですが、人々の生きようとする力や他者を思いやる心、異なるバックグラウンドを持つ人々との交流が彼女の働く原動力になっています。「引き続き、全ての人々が尊重され、尊厳を重んじられるような社会のために尽力したい」と力強く語ります。

【IYEO会員個人の活動】一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）

代表理事　辰野まどかさん
第28回「東南アジア青年の船」事業（2001年）

英語嫌いだったけれど

「英語嫌いで海外に興味がない中高生だった」という辰野さん。しかし、お母さまからの17歳の誕生日プレゼントは、なんと「スイスの国際会議に参加する権利」でした。そんな突然のきっかけから、スイスへ行き、世界の人々が共に、平和づくりのために対話する場の大切さを実感したそうです。そこから辰野さんは世界に興味を持ち始め、大学生の時に「東南アジア青年の船」事業に参加します。その後、「世界青年の船」事業の管理部員やディスカッションのファシリテーターとして何度も船の事業に関わってきました。

究極のグローバル教育

もともと「グローバル・シチズンシップ（地球志民）」育成を目的としたグローバル教育を専門としていた辰野さんは、より良い未来を作っていくために、多様性から新たな価値を生み出せるグローバル教育を通して、平和づくりに貢献していきたい、という思いがありました。

そんな辰野さんにとって、「世界青年の船」は「地球志民」や「地球社会」という言葉を身をもって体感できるプログラムでした。国、宗教、文化、言語、人種、様々なバックグラウンドを持つ若者たちが、どの国にも共通する教育、環境、異文化理解などのテーマで話し合い、共に歌い、踊り、文化交流をします。肌で、五感で、心で自分が地球の一員であることを実感します。船内という隔絶された環境、そして、船という舞台が生み出す一体感と、多様性に満ちた若者たちのエネルギーあふれるプログラムは、「究極のグローバル教育の現場」だったと感じていたそうです。

まだ知られていない概念だった

究極のグローバル教育の現場を数多く体験し、辰野さんはついに2012年、一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）を立ち上げます。当時はまだ「グローバル・シチズンシップ」という概念自体が知られておらず、「地球志民」とか「地球社会」と言うと、周りからなかなか理解が得られにくく、不安になることもあったとのこと。でも、最近SDGs等の活動が認知され、「グローバル・シチズンシップ」は、文字通り市民権を得はじめています。

辰野さんが考えるグローバル・シチズンシップとは、留学する人や国際社会で生きる人だけの特権ではありません。地球のどんな場所でどんな生活をしていようと、たとえ村から一歩も出たことがなくても、地球社会を共有する市民なのです。そういう私たちが未来の地球社会に何がギフトできるんだろう？という問いとともにもつ「世界をより良くする志」を「グローバル・シチズンシップ」と呼んでいます。GiFTでは教育プログラムとして、その志を引き出し、自分や自分の生活を地球レベルの大きな視点で捉える目を養う場づくりをしています。

やりたいことが見つかっていなくても

辰野さんは、まだやりたいことが見つかっていなくても大丈夫だと言います。「夢があるけど、どうかなえていいかわからなくても大丈夫。多くの志ある仲間に出会うことで、自身の思いが見つかったり、夢をかなえていく同志に出会ったりできます。18歳から30歳までの若者が参加できるこれらのプログラムは、きっとあなたにとって一生モノの経験になります。船という舞台でいろんな価値観に出会い、いろんな気持ちを味わうことは、このプログラムでしかできない貴重な体験です。ぜひ自分の肌で、五感で、心でどっぷりと味わってきていただけたらと思います」

ASEAN+3 ユース・デジタル・ビジネス・サミット2019

2019年12月9日（月）～12月12日（木）、ASEAN 諸国の青年たちが、起業家、研究者、官民セクターの産業界リーダーとともに、デジタル・ビジネスによる公平で持続的なマーケットプレイス構築において、青年が果たすべき役割について話し合うサミットがマレーシアで開催されました。マレーシア政府青年スポーツ省より日本代表者の推薦依頼があり、日本青年国際交流機構（IYEO）から3名が出席しました。以下に参加報告書の一部を掲載します。

三井梓さん
「東南アジア青年の船」事業
（2013年）

デジタル化の恩恵を受けられない人たちは

2日目の講演では、公共サービスに進出する際の平等性とASEAN諸国のスタートアップベンチャーの性質についての質疑応答が印象的だった。日本、中国、シンガポールの代表青年は、若手起業家であるスピーカーに度々批判的な質問やディスカッションを行った。“Building Up the Best Digital Business Ecosystem/E-Commerce” という講演で、「視覚障がいなど何かしらのハンディキャップを持つ人は、QRコードを利用した支払いシステムにおいてはデジタル化の恩恵を受けられない点についてどのように考えるか」という質問があった。これに対して、「QRコードは低コストであること、ASEAN諸国ではスマホ保有率が130%である」といった現状に触れ、「これはマインドセットの問題である」とスピーカーはまとめた。質問をしたシンガポールの青年やそれを引き継いで議論を続けた日本青年にとって、企業の社会的責任の捉え方が異なることを感じさせる場面であった。

私はASEAN諸国のベンチャーの日本企業との協業について、どのように考えているか質問した。これに対して、東南アジアのスタートアップ企業はローカルな課題解決のために起業することが多いため、本質的にサービスがマッチしない可能性が大いにあると回答された。ASEAN諸国のスタートアップベンチャーが、グローバルな課題を解決するブレークスルーの可能性を持つ技術探求段階まで到達していないことを実感した。

日本から積極的にASEAN市場へ

一方で、アリババのASEAN諸国におけるM&A例は、参加者に強いインパクトを与えた。ASEAN諸国から日本へ参入する企業がなくても、日本からASEAN市場へ積極的に入ることが、今後日本が活動できるマーケットを確保しておくためにも重要であることを実感した。

私は学生時代に「東南アジア青年の船」事業に参加し、国際交流という形でASEAN諸国の参加者たちと交流し、理解を深め、それぞれの特色を深く知るとても重要な機会となった。ASEAN共同体のつながりや規制は、異なる文化、習慣、宗教、言語等を持ちながらも相互協力の要素が大きく、独特なものであると思う。これらを理解し、それぞれの国の立場で物事を考えられることは、クロスボーダーで発展しようとしているビジネスを理解するにあたって役立つバックグラウンドであった。これからも「東南アジア青年の船」事業においては、その経験を持って他国が主導するプログラムを通じて参加者が深い理解を示してその能力を発揮し、有益な時間と経験を生み出すことに使命があると感じる。

信頼を「借りる」

“Reshaping entrepreneurship & Business”のセッションでの GO GETの方の「新しいビジネスモデルのサービスを利用してもらうためには信頼が必要で、信頼を得るには三つの方法がある。1. 信頼を買う、2. 信頼を借りる、3. 信頼をつくる。3は本質的だが、時間がかかる。1は即効性があるが、お金がかかる。そこで私たちは2を選びました」というお話が印象的でした。私はこれまで「コレヲキニ」などの活動で3の「信頼

をつくる」ことしか選択肢にありませんでしたが、2の「信頼を借りる」という方法もありえるのかと感心しました。今までにも内閣府から後援をいただくなど「信頼を借りる」に該当することをしてきたのかもしれませんが、意識的にはできていなかったと感じました。

その後、もともと関心があったE-walletについてのセッションで、昨今の日本の○○pay乱立問題について説明した上で、「キャンペーン以外の観点で差別化は可能なのか」という質問をしました。これは、お金をばらまいたりする一時的集客マーケティング観点ではなく、プロダクト観点で差別化できないかという意図に基づくものです。しかし、プレゼンター回答は「支払う度に、くじがひけるようにしている」というマーケティング観点からのものでしたので、プロダクトで差別化するのは難しいのかもしれないと感じました。

ダイアローグ・セッションでは、各国のデジタル化やIR4.0に関しての意見交換が行われ、参加者が自国の課題を率直に発表していました。その中でも、同じく日本代表として参加した源さんが「シリコンバレーとは地名ではなく、マインドセットのことだ」と発言されたのが非常に印象的でした。シリコンバレーのような場所を提供するといったハード面に目がいきがちですが、本来はマインドセットのようなソフト面にこそ注目すべきだと思いました。

大草真紀さん
グローバルリーダー育成事業
（2013年）

デジタルは在りたい世界をつくるための手法

私も今回のサミットへの参加を通じて気になっていたことを発表し、他の参加者から賛同いただけたのがとても嬉しかったです。デジタル領域で6年間働いてきた自身の経験を踏まえ、「デジタルサミットではあるけれど、デジタルに固執する必要はない。デジタルは在りたい世界をつくるための手法であって、目的ではない。アントレプレナーが考えるべきはデジタルの使い方ではなく『在りたい世界』だ」という話をしました。

全体を通して、対ASEANとして日本はまだプレゼンスを保てていると感じました。しかし、今後いつまで保てるのか不明な面もあります。プレゼンスを保てている間にそれを活用しながらサービスを拡大していくのがよいし、それが日本のプレゼンスをさらに向上させていくことにもつながるのではないかと思いました。

源飛輝さん
国際青年育成交流事業
（2012年）

簡潔かつ印象的に伝える20秒間

会議1日目に行われたPecha Kuchaというセッションが新鮮であった。Pecha Kuchaとは、プレゼンテーションのフォーマットの一つであり、発表者が20枚のスライドを用意し、1枚につき20秒間が与えられる（つまり、プレゼンテーション全体で400秒間）。20秒経過すると自動的に次のスライドに移ってしまうよう設定されており、自らのテーマやメッセージについて、簡潔かつ印象的に伝えなければいけない。これ自体は日本発のものと仄聞（そくぶん）したが、個人的には初めての経験だった。

ラオスからの参加者と共にグループワークを行い「IR4.0時代における社会課題の解決方法」について発表を行ったが、印象的だったのは同じ「IR4.0」や「社会課題」という単語からも参加者によって全く異なる連想をすることだった。例えば、「貧困」一つとってみても、日本で問題になるのは「相対的貧困」が主である一方、国が違えば絶対的貧困の解決など視座が変わってくるのである。他の例としてQuality Education for Allという言葉が意味することも実行しなければならない内容も、参加国ごとに前提条件が違うため、そこからすり合わせが必要であり、広い視野を持たなければならなかった。

会議二日目には、本会議の実質的な山場であるExplore KULが行われた。これは、参加者がクアラルンプール内の各スポット（ローカルマーケット等）の課題に対して実際に現地を訪れて取材し、デジタルソリューションを応用して解決する提案を行うもので、さらに最終的には映像に起こしてビジュアルコンテンツとして提出しなければならないという制約（実に「デジタル」な趣旨に合う）のついたコンテストであった。ここではグランプリを獲得することができて嬉しかったが、なによりこのコンテストが参加者同士の親睦のきっかけとして機能して、ASEAN+3各国からの参加者と発展性のあるネットワークを構築でき、友人を得られたのがありがたかった。

各界の第一線の人物と意見交換

政府高官や閣僚、Forbesの30 under 30 に選出された起業家や、アリババ資本のアクセラレーター、シリコンバレー発の有力ベンチャーキャピタルである500 startups等、各界の第一線の人物や研究者と意見交換でき、ブロックチェーンやFintechの台頭、AR/VR、ビッグデータにAI等、幅広いテーマで政策的・技術的知見を深められたことは大きな収穫となった。今回、マレーシア政府より貴重な席を頂戴し、ASEAN+3の会合に我々の提言も具申されるが、これは送り出していただいた内閣府の皆様のご協力なしにはあり得ず、改めて感謝申し上げたい。

ASEAN+3 ヤング・リーダーズ・プログラム/共生社会国際会議

2019年6月18日(火)〜21日（金）にシンガポールにて、ASEAN+3 ヤング・リーダーズ・プログラム/共生社会国際会議（Young Leaders' Programme /International Conference on Cohesive Societies (ICCS))が開催されました。シンガポールのNational Youth Councilより日本からの参加者の推薦依頼があり、日本青年国際交流機構（IYEO）から推薦された3名が参加しました。以下に参加報告書の一部を掲載します。

異なる立場の人の理解促進を促す「民間企業の役割」

白幡香純さん　「世界青年の船」事業（2006年）

会議二日目、シンガポールのハリマ・ヤコブ大統領とヤングリーダーとのディスカッションタイムが設けられた。ヤコブ大統領は今回の共生会議のような対話を一過性のイベントとして終えるのではなく、グローバルに継続していくことの重要性を強調された。シンガポールでは、マイノリティの権利を守る政策や宗教リーダーたちとの定期的な対話の仕組み、宗教間の調和を促す活動に提供されるHarmony Fundなど、政治・経済・社会システムとして、多方面から共生社会を継続して構築するために、いかに多大な投資や努力をしているかを知った。

他方で、本会議に参加していない人や、そもそも宗教に関する対話自体に関心がない人をどう巻き込めばよいのか、という疑問を持っていた筆者から、「異なる背景を有する人々との対話を日常的に実践する場としての職場環境の在り方など、民間企業に期待している役割はあるか」とヤコブ大統領へ問いかけてみた。

すると、「企業にも様々な宗教や多様な背景を有する社員がいるので、企業が職場環境を整えることで果たせる役割は大いにある。差別的な態度をとらず、社員同士がお互いに尊重し合える環境を作ること、コモンスペースを見つけること、会社のガイドラインを見直すことも共生社会を形作るためにできること」との助言をいただいた。

今回のICCSのアプローチは宗教間の融和を目指すことに重きが置かれていたが、異なる思想を有する相手に対するアンコンシャス・バイアス(無意識の偏ったものの見方) をとりのぞき、対話の場をどのように作るかという点で参考になった。今後、生まれた背景や宗教、ジェンダーにかかわらず、個人が才能を開花するような仕組みづくりに邁進していきたい。

多宗教共生社会の海外輸出―国家戦力としての可能性

村瀬美咲さん　シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ（2016年）

ICCSとは、今年初開催のシンガポール政府による多文化共生よりも多宗教共生に重点を置いた国際会議である。宗教がらみのエクストリーミストによるテロの脅威が大きくなる昨今で、いかにいろいろな宗教を認知し、配慮するかという共生方法をシンガポール政府のベストプラクティスとして海外に輸出しようという国を挙げたプロジェクトだと感じた。ASEAN諸国以外にもヨーロッパやアメリカ、南米の人まで多種多様な人が集まった大規模な国際イベントだった。日本の問題点として、宗教という言葉自体がタブー視されていることそのものがグローバリズムにおいていかれる可能性がある。会議中、神道やキリスト教布教者の日本人の方とお会いしたので、その数少ないリソースを今後もグローバルな場面においてもうまく活用する必要があると感じた。一番印象的だったことは参加者確認をせず、かしこまった机やいすはなく、ビーンバッグにみんな寝転んでリラックスした環境を提供することで、難しいトピックを本音ベースで語れる空間を作ったことだった。プライベートな話だからこそ立場などを抜きに人と向き合う雰囲気作りは、国際会議の固定概念を振り払い、話す環境を変えることで達成できたと思う。

この経験から私個人として、今後もICCSでの学びを共有するワークショップ運営を含めたIYEOの活動に積極的に参加するとともに、日本のグローバリズムを促進できるような活動をしたいと強く思った。

みんな似たような課題に直面している

伊藤知子さん　「東南アジア青年の船」事業（2011年）

私が自分の居住地である川崎市を中心に展開している「多様性理解の促進」に関するワークショップでは、本テーマに関心のない人にどうやって場に参加してもらうかという課題に直面している。その課題を共有したところ、他の参加者から「ターゲット層をもっと具体的に描いた方が良い」というアドバイスをもらった。また、私が直面している課題は、シンガポール政府が感じている課題とも共通していることが、シンガポールのハリマ・ヤコブ大統領の講話から分かった。みんな似たような課題に直面しながらも、絶え間ないトライ＆エラーを通じて、自分たちの理想とする「共生社会」というゴールに到達できると信じて、歩みを止めることなく取り組んでいることを知り、とても勇気付けられた。すばらしい各国リーダーたちと築いたネットワークが会議会期中だけにとどまらず、更に深まるように、YLPメンバー一人一人と時間の許す限り個人的にネットワークを築き、交流を続けられるよう努力したい。

ICCS期間中に、「東南アジア青年の船」事業の同期と再会し、シンガポール・日本間の若者（現時点では高校生を想定）交流を通じて、両国の青年育成の一端を担うワークショップ開催に向けて、IYEOチャレンジファンドへの応募を睨みながら、企画を詰めていくことについて合意したので、本計画を着実に進めていきたいと考えている。

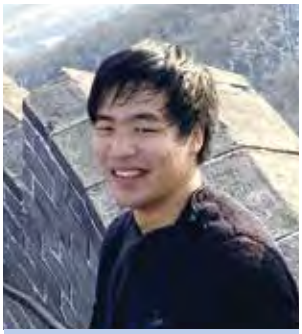
【IYEO会員個人の活動】 日中友好大学生訪中団

2019年12月20日（金）～12月24日（火）、日中青少年交流推進年を記念し、日本の大学生が中国の大学生との交流を通して相互理解を深め、日中両国の善隣友好の絆をより強いものにしていくため、公益社団法人日本中国友好協会にて選抜された200名の学生が中国を訪れました。認定NPO東京都日本中国友好協会から代表青年の推薦依頼があり、日本青年国際交流機構（IYEO）から8名の学生が派遣されました。同協会とIYEOは、今年度より相互に団体会員となり、主に中国に関する活動について連携を進めています。以下に派遣報告の一部を紹介します。

齋藤友里奈さん
日本・中国青年親善交流事業
（2019年）

今回特に印象に残っているのは、中国が青年の起業を強く推進しているということです。優客工場（Ucommune：北京を拠点に世界44都市にコワーキングスペースを置く起業支援プラットフォーム）を見学した際に、中国では就職先が不足しており、その解決策として青年の起業を促すようになったと聞きました。就職が大変であるという悩みは日本と同じですが、働く場所がなければ作ってしまおうという発想を持つ青年は今の日本には少ないと思います。優客工場で起業のために努力している青年の姿は刺激的でした。コワーキングスペースでありながら、ジムや食堂、音楽を楽しむための防音部屋、仮眠をとるためのカプセルなどが設置されていて、起業が全面的にサポートされていることが感じられました。もとはスーパーが入っていた場所にコワーキングスペースを創り上げる発想力にも驚かされました。私自身は起業にそこまで興味を持っていませんが、興味を持っている日本青年のために国も動いていく必要があるのではないかと感じました。

私は、2019年度の日本・中国青年親善交流事業の中国青年招へいプログラムで、北海道IYEOの一員として受入れのお手伝いをしました。その際に、既参加青年である先輩の背中を見て、自分もあのようになりたいと強く思うようになりました。今回の訪中では、受入時の役割と少し通ずる点があると感じ、副班長を務めました。函館で受入れを経験してから、活動に受け身で参加することがなくなりました。全体に目を向けて自分はどのようにすべきか、何をするべきかを考えられるようになりました。過去の私からすれば、少し成長できたと思いますし、今回の訪中でもそれを発揮することができました。今後は、自分の考えを行動に移せるように積極性と臨機応変に対応できる力を高めていきたいです。



中悠汰郎さん
日本・中国青年親善交流事業
（2019年）

今回の訪中団は、日中青少年交流推進年の先駆け的な事業とのことであったが、私たち青少年が海外に大切な友人がいるということ、それは何よりも私たちの視野を広げてくれるし、相手の国への真摯な姿勢を作る大きな契機となるように思う。国際交流事業に対する理解が深まった派遣であった。また「百聞は一見にしかず」という言葉があるように、今回の派遣でも日本で抱いていた中国人に対するイメージとは全く異なる優しさや大らかさについて知ることもできた。中国に初めて来た団員も皆が中国を好きになったと喜んでおり、今回の訪中団の意義を強く感じた。

人民大会堂に招待され、日中合わせて千人の学生が一堂に会する催しがあり、そのスケールの大きさには本当に驚かされた。中国では派手に幕を張ったり、スピーチが行われたりと、日本とは少し違った雰囲気を感じることが多く、一つ一つのイベントの見せ方が非常に上手であると感じた。参加者の気持ちが引き締まるような見せ方については、日本でもっと取り入れてもいいのではないかと思う。万里の長城や天安門広場、天壇公園など中国の有名な観光地にも足を運ぶことができたが、どこもスケールが大きく、色々な歴史を感じ、伸び伸びと過ごすことができた。この壮大さは中国の何よりの魅力だと思った。

今回の訪中団で、自分の人生の中で良い思い出ができたと共に、中国をもっと好きになった。医学という自分の専門分野で将来中国と関わりを持つことについてより具体的な目標の一つとして思い描けるようになり、中国語と英語を学習したいという思いもより強くなった。少しでも日中友好の架け橋になれるよう頑張っていきたい。

【IYEO会員グループの活動】 IYEOパラスポーツ振興チーム

東京2020大会等国際大会の実施に向けて、IYEO会員の多様な人材の能力をいかして貢献することを目的とし、IYEOパラスポーツ振興チームは、国境／障害の有無による垣根なき大会の実現のため、次の三つの目的を軸に活動しています。

目的とミッション

Borderless Olympic & Paralympic

1. 大会参加者がスポーツを通じて経験を共有し、国境の垣根を超えて関係を構築する。
2. パラスポーツの認知度/理解度を向上させる。
3. 訪日外国選手/観客の快適な日本滞在をサポートする。

IYEOとパラ卓球のつながり

IYEOとパラ卓球の関係は2015年に始まり、IYEOはパラ卓球の国際大会要項翻訳等のサポートを現在まで継続しています。大分県青年国際交流機構の前会長である阿部友輝さんがPTTA（肢体不自由者卓球協会）の理事を務めていたことがきっかけで両団体の交流が始まりました。

現在の活動

現在IYEOパラスポーツ振興チームは次のような活動を行っています。

- パラ卓球国際大会の大会要項翻訳
- パラ卓球代表選手への英会話講義
- 2019年パラ卓球日本オープンにおける通訳サポート

ボランティアの所感

東京2020大会等国際大会につながる国際大会にアテンドボランティアとしてかかわることができたことへの満足感と、無事に大会終了の日を迎えられたことへの安心感を抱いています。

大会当日まで業務内容が明確ではなかったため、その場で対応することが求められましたが、対応力の高いアテンドボランティアのおかげで、大きな問題に発展することもなく、無事に終えることができました。これは、アテンドボランティアが内閣府青年国際交流事業で培った異文化対応力、コミュニケーション力、マネジメント力、リーダーシップなどをいかすことができている証です。

IYEOパラスポーツ振興チームとして、事前準備、当日の運営に多くの改善点が見つかりました。今回の大会での反省をいかして、これからの活動をより良いものにしていきます。

メディア対応通訳サポート

ボールパーソン

英会話講義

コレヲキニ 全ての人の「これを機に」を後押し

コレヲキニとは、内閣府青年国際交流事業に参加したことのあるIYEO会員が2018年に始めた活動です。コミュニティーに関わる全ての人の「これを機に」を後押しする存在として、深く考えるきっかけや一歩を踏み出すきっかけを作るイベントを企画・運営し、誰もが拠り所とできるプラットフォームを形成します。

2018年1月13日のコレヲキニMeetup#1を皮切りに一年間で計8回のイベントを開催し、約450名が参加しました。参加者の7割は内閣府青年国際交流事業のOBOG、3割は外部の多方面で活躍されている方々です。これまで1泊2日の合宿型ワークショップやキャンプをしながら自然の中で内省するワークショップを開催し、参加者が一歩踏み出す機会を作ってきました。ここではメインイベントであるコレヲキニMeetupの内容を紹介します。

「気づく・繋がる・コレヲキニ」

「気づく・繋がる・コレヲキニ」 Meetupの魅力は多様な方々のライフストーリーに触れながら三つのステップで進んでいきます。

1. 気づく：　社会起業家や国際機関、社内新規事業から世界一周まで様々な分野で活躍されている方からのショートプレゼンテーション。これを機に人生が変わったプレゼンターのライフストーリーから新しい気づきを得る。
2. 繋がる：　事業を超えて、参加者同士が今夢中になっている事、頑張っている事を共有。共通の興味関心を持つ仲間を見つける。
3. コレヲキニ：　一歩踏み出したいスモールアクションに落とし込む。繋がった仲間と一緒に踏み出すきっかけを作る。

中国ブロック大会とのコラボ 「コレヲキニMeetup in 周防大島」

中国ブロック大会にて初のコレヲキニイベントの地方開催が実現しました。ブロック大会開始前に各県からの参加者同士を知り、安心・安全な場作りを目的として岡山県のNPOだっぴさんとコラボし、コレヲキニMeetupを実施しました。各県で活躍されている二人の若手IYEO会員からのコレヲキニストーリーのプレゼンテーションを聞いた後、参加者同士でこれから取り組みたい事、今わくわくしている事を共有し、内なる気持ちを知ってもらう機会を作りました。この流れは夜の懇親会にまで続き、多くの参加者が懇親会の中でIYEO活動に対する想いや、新しく挑戦したい事など自身のストーリーを自然と次から次へとバトンタッチしながら話していく時間となり、その想いに対する応援の気持ちにもあふれた時間となりました。

【IYEO会員グループの活動】 See You Soon Project

See You Soonプロジェクトは、2018年度「東南アジア青年の船」事業（SSEAYP）に参加したIYEO会員が事後活動として有志数名で立ち上げた国際交流プログラムです。具体的には日本の高校生とASEANの学校間で手紙を交換したり、SNSを用いたオンタイムでの交流やASEAN加盟諸国へのスタディツアーを通じて実際にペンパルとの交流を行ったりしています。SSEAYPで培った経験とネットワークをいかし、日本の若者に「将来世界に出ていく『理由』を作る」ために活動しています。

この「理由」とは「友達」のこと

「友達に会いに行くこと」それ自体がお金と労力を使い「海外に行く」理由になり、「友達がいるということ」それ自体が一つの国や地域、文化に熱中し、人が人生を捧げるに値する理由になるのだということを日本の若者にも感じてもらいたいと思っています。

また、日本全国の若者が、こうした国際交流の機会を持つ中で、ローカルで活躍できるリーダーとして、グローバルに羽ばたける人材として、強くしなやかに成長していけるようなコミュニティを創造していきます。

活動の二つの柱

① 内閣府事業で培ったネットワークを活用し、国際交流を入り口とした地域に根ざしたリーダーシップ育成プログラムを創造すること。

② 日本の青少年とASEANの青少年の間で「友情」を育むことで、日本の青少年が「友情」を通してASEANの文化や社会に興味を持つ機会を提供すること。

プロジェクトの現状

2019年度活動地域：福島県、愛知県、新潟県、ブルネイ、ミャンマー
参加学生数(延べ人数)：582名
セッション開催数：　8セッション(3か国5地域)
2020年度活動予定地域(状況により変更有)：福島県、神奈川県、京都府、栃木県、新潟県、ブルネイ、ミャンマー、インドネシア、マレーシア、シンガポール

共催：日本青年国際交流機構／IYEOチャレンジファンド助成事業

【IYEO会員グループの活動】 One More Child Goes To School Project

（スリランカの子どもたちの教育支援プロジェクト）

～支援開始から12年　広がる支援の輪～

SWY30からの寄付で文房具を購入し、2校66名に寄付。全校児童、先生、保護者とIYEO会員を含む学校訪問ツアー参加者（ウドゥピーラゴーダ小学校、2018年）

プロジェクトの背景

スリランカには、家庭の経済的な問題等で学用品等を購入する充分な資金を得られない子どもたちが数多くおり、そのような子どもたちが継続して学校に通えるように支援することが必要とされています。日本青年国際交流機構（IYEO）の会員によって構成されたプロジェクトチームは、社会貢献活動の一つとしてこのプロジェクトを2008年に開始しました。2008年～2009年は学用品の寄付のみで実施、2010年からは学用品の寄付に加えてフォスターペアレンツ（里親）プロジェクトを開始しました。また、折々にチャリティーイベントを開催し、プロジェクトの状況をお話しするとともに、物販などで得た収益を学校へ寄付しています。

2019年にはペアレンツ100組に到達

子供向け普通預金の書類を持つ奨学生

フォスターペアレンツ（里親）制度は、2019年までの10年間でペアレンツが延べ100組（個人支援に加えて家族や仲間を一単位で数えています。実際は130名強が登録）、支援した児童数は延べ224名になりました。初年度に25組だったペアレンツは、徐々にIYEO会員以外にも口コミで広がり、現在は2割が会員紹介の家族や友人の方々へと広まっています。プロジェクトの規模が大き過ぎず、寄付の場所が明確で児童との交流を大切にしている点を評価いただけていることに感謝しています。

ケラニティッサ小学校の奨学金生とコーディネーター

グナラトナ小学校に必要な物品を寄付

2019年は4校を支援

現在は南部マータラ県ハクマナ地区にあるブッダジャヤンティ小学校（2010年～）、グナラトナ小学校（2018年～）、ウドゥピーラゴーダ小学校（2018年～文房具提供のみ実施）、中西部コロンボ郊外にあるケラニティッサ小学校（2019年～）の4校を支援しています。

2009年からプロジェクトリーダーが毎年支援校を訪問しています。現地のコーディネーターの支えとともに校長先生や教職員との話し合いを重ね、その都度、学校が最も必要としているものを支援者の皆様からの寄付で届けています。

今後について

ブッダジャヤンティ小学校は、10年間の支援で一定の成果を上げたことに加えて、全奨学金生が2020年末で卒業することから支援を終了とします。また、2019年4月は、スリランカ国内での同時爆破テロ事件があり、政情不安から安全を第一に考えて日本からの訪問は中止しました。

これからも継続して活動を地道に行っていきますので、引き続き、皆様方のご支援をどうぞよろしくお願いします。

One More Child Goes To Schoolプロジェクトチーム
問い合わせ　onemorechild@gmail.com

【IYEOの活動】都道府県IYEOの活動 北海道IYEO

北海道青年国際交流機構は、国際交流のすばらしさを数多くの人たちに伝え、北海道から世界に羽ばたく人を生み出すことなどを目標に活動しています。内閣府事業の地方プログラム受入れをはじめ、数多くのイベントを実施していますが、そのうちの一部を紹介します。

北海道国際協力フェスタ

2019年12月15日に札幌の地下歩行空間にて開催した「北海道国際協力フェスタ」に今年も北海道IYEOが活動紹介ブースを出展しました。北海道IYEOのブースにもたくさんの人が来られ、目標の60名に内閣府青年国際交流事業やIYEOのパンフレット、2月に行う国際交流事業募集説明会のチラシをお渡しし、内容などを伝えました。

高校生や大学生が興味を持っていろいろ質問してくれたり、事業内容を聞いて、孫や子に知らせたいと来てくださったり、たくさんの方に知っていただく機会となりました。また、道内の他の国際協力、交流団体の方々とも知り合うことができました。

胆振東部地震被災地視察

2018年9月6日に北海道胆振東部地震が発生しました。北海道IYEOでは、復興支援活動を行うことを決定し、まずは被災地の状況を視察して、現地の方から、被災状況や避難所や仮設住宅について伺いました。ボランティアに来ている方からも何が求められるか等のアドバイスをいただき、自分たちができることを継続的に行うということを学びました。復興支援活動を行うにあたり、IYEO本部から大規模災害支援金をいただき、全国大会では多くの方が活動資金を寄付してくださいました。

また、会員の宮澤未央さん（世界青年の船2016年参加）が北海道にちなんだLINEスタンプを作り、その売り上げも活動資金に充てられました。復興支援活動は2019年7月20日～21日の1泊2日で「Visit胆振」と題して全国から参加者を募り、被災地を訪問し、現地の方と交流することで心のケアを行うイベントを開催しました。

宮澤未央さんによるオリジナルLINEスタンプ
「ほんわかシュール北海道みるくまくん」

冬の防災セミナー

胆振東部地震を受けて、2019年1月12日～13日、合宿型防災セミナーを実施しました。札幌市白石区の防災センターを見学し、各種災害体験を通して正しい対処方法について学びました。民泊施設では、新聞紙とブルーシートを使った寝袋作りや新聞紙で作るスリッパなど手軽にできる防災術を実践しました。

被災地域を応援するため、夕食はむかわ町のししゃもや安平町の餃子、厚真町のジンギスカンを用意し、翌日の朝食には多種多様な非常食を食べました。

参加者の半数が外国人だったため、9月の地震発生時の話や各国の防災に対する備えなどについても聞きながら交流できました。

大学説明会

2020年1月15日、札幌市の北星学園大学にて大学説明会を行いました。北海道IYEOでは、会員が母校を訪れ、自身の体験談とともに、内閣府事業でしか経験できないプログラムの良さについて語る取り組みを行っています。

今回は、北海道IYEOの平中沙也香会長（世界青年の船2016年参加）が母校を訪れ、「世界青年の船」事業に参加したきっかけや体験について語り、IYEO国際担当幹事の小田玲実さんが内閣府事業の概要や応募方法について説明しました。北星学園大学は国際交流に積極的で、関係部署からの協力も得られ、説明会には9名の学生が参加しました。応募を前提とした詳細な質問をする学生も多く、充実した説明会となりました。

東日本大震災復興支援活動　小学校へのミシン寄贈

東日本大震災から9年が経過しました。東日本大震災の義援金は発生当初から全国、そして世界から多額の寄付が寄せられました。毎年、被災3県（岩手県・宮城県・福島県）のIYEOが、被災地のニーズを把握し、何が被災地にとって最善の支援かを検討してきました。

今回、東日本大震災後、石巻市内で人口が最も急増している蛇田地区にある石巻市立蛇田小学校に、ミシンを8台寄贈しました。蛇田小学校は震災当時、津波により周辺に水が迫りましたが、建物に水が入ることはなく、翌日には水が引きました。建物被害がなかった分、避難所として機能することとなり、地震直後からたくさんの人がつめかけました。同小学校は震災前、児童数約500名だったのが、現在は800名を超えています。蛇田地区は宅地造成や復興公営住宅の建設地であったため、様々な地域から移り住んできた人たちによって急激に人口が増えている地域だからです。各学年5クラスとなり、昨年度からようやく仮設のプレハブ校舎を建てて教室を確保できている状態です。教室だけでなく、教材の数も足りない状況です。子供たちの学習にも影響が出ていますが、市の予算が限られていて、教育委員会がメンテナンス費用を捻出するのが難しい状況であるため、保護者主体のPTAへの寄贈となりました。

寄贈当日、阿部校長先生から「現在学校にあるミシン自体も非常に古く、教員だけではメンテナンスが行き届きません。使える台数と時間に限りがあるため、授業時間中に一人5分も使うことができません。震災により転校してきた児童は、自宅が津波で流されているため、家にはミシンがないのです」とおっしゃっていました。本来の授業時数で学習が終わらないうえに、家庭でのミシン所有率が低く、非常に困っていることを聞きました。

直接ミシンを手渡した男児からは「家庭科の勉強を一生懸命頑張りたいです！」と力強く御礼の言葉をもらい、厳しい環境の中でも前向きに学習したいという強い意欲を感じられました。全国、世界からの支援により子供たちの学習の機会が増えるよう、学習環境を整えることができたことに感謝しています。

■支援実績

対　　象：石巻市立蛇田小学校（児童数820名）高学年の家庭科授業、手芸クラブ等で活用
支援内容：JANOMEスクールミシン395型PD 8台

SDGsで見える!! 世界の未来・自分未来・ぎふ未来

2019年7月21日（日）、岐阜県立岐阜各務野高校にて、カードゲームを通じて世界の「いま」を体感し、自分たちができることについて考える「SDGsで見える！！世界の未来・自分未来・ぎふ未来」というイベントを実施し、講師2名を含む36名が参加しました。

今回は、岐阜県社会福祉士会との共催で、地域福祉と青少年育成、国際開発をテーマに準備を進めてきました。当初は、福祉科を中心とするボランティア活動部に所属する高校生を対象にしていましたが、当日は部活動や学科を越えて多数の参加者が集まりました。事前準備に参加していない人の中には当日初めてSDGsについて知った人もいましたが、ゲームを通じて、世界の問題や多様性を理解してもらうことができました。身近な暮らしの行動一つが、まだ見ぬ世界のどこかと誰かとつながっていることに気付き、「私が今できること」を自発的に考える機会となりました。自分だけが良ければいいのではなく、社会に対する自己の行動責任を理解することができたと思います。

また、今回の企画に参加した人には、手すきの美濃和紙で作った「ボランティア認定証」をお渡ししました。岐阜県IYEOが企画・運営する地域活動に参加することで、草の根国際交流や地域活性化への取り組みに触れるきっかけになればと思います。

手すきの美濃和紙で作った「ボランティア認定証」

今回のイベントは、岐阜のまちを大切に想い、将来、地元で活躍する人材づくりの契機として大きな収穫がありました。今後もこのネットワークと、彼らの個性や潜在的な力を発揮できるよう、地域性を生かした企画を考えていきたいと思います。（岐阜県青年国際交流機構 副会長 久髙亜希子）

時間	活動内容
13:00-13:30	岐阜県IYEOと講師の紹介、アイスブレーク・自己紹介
13:30-15:30	SDGs概要、カードゲーム 講師: SDGsカードゲーム「2030SDGｓ」公認ファシリテーター 辻 晃一
15:30-16:30	岐阜県内のSDGsに取り組む企業の話 三承工業株式会社 （岐阜県岐阜市）
16:30-17:00	じぶん未来宣言 !!

共催：岐阜県IYEO、岐阜県社会福祉士会／ IYEOチャレンジファンド助成事業

【IYEOの活動】内閣府青年国際交流事業地方プログラム

内閣府青年国際交流事業では、地方公共団体等の参加と協力を得て、日本国内での地方プログラムを実施しています。受入各県において、各国参加青年と地元青年によるディスカッション、ホームステイ、各種施設への訪問等を行うことにより、各国の参加青年にわが国の歴史・社会・文化等への理解を深めてもらうとともに、受入各県の地元青年が招へい国の青年と交流する機会を創出しています。本年度は、29府県市において、地方プログラムが実施されています。

■地方プログラムの目的

日本を多角的に紹介・・・外国青年

・ 招へい外国青年に多様な地域社会及び文化を伝え、日本を多角的に理解してもらう

社会貢献の実践の場・・・実行委員

・ 内閣府青年国際交流事業の参加青年は、事業で得た成果をそれぞれの地域で発揮することで、社会貢献活動の場にする

地域活性化・・・各都道府県市

・ 受入れに関わる多くの方に国際交流と異文化理解の楽しさを伝え、地域の魅力を再発見してもらうとともに地域活性化を図る

■地方プログラム実施実績

事業名	日程	受入府県市
国際社会青年育成事業	10 月 10 日～ 18 日	富山県、茨城県、香川県、愛知県、高知県、岡山県
日本・韓国青年親善交流事業	7 月 28 日～ 8 月 4 日	岐阜県、三重県
日本・中国青年親善交流事業	8 月 26 日～ 9 月 1 日	函館市、鳥取県
地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」	12 月 3 日～ 8 日	島根県（高齢者分野）、石川県（障害者分野）、鹿児島県（青少年分野）
「東南アジア青年の船」事業	10 月 26 日～ 29 日	青森県、岩手県、福島県、千葉県、神奈川県、新潟県、長野県、大阪府、佐賀県、長崎県、熊本県
「世界青年の船」事業	2020 年 2 月 21 日～ 24 日	山形県、静岡県、和歌山県、広島県、大分県、

【IYEOの活動】

青少年国際交流事業事後活動推進大会（全国大会京都大会）

2019年8月24日（土）～8月25日（日）、京都府京都市にて、青少年国際交流事業事後活動推進大会、日本青年国際交流機構第35回全国大会、第26回青少年国際交流全国フォーラムが開催されました。『不易流行』～古都の伝統を基軸とした新たな挑戦～というテーマで、全国から関係者を含め約196名が集いました。

基調講演は「伝統とは絶えざる革新なり」というタイトルで、浄土宗龍岸寺住職の池口龍法氏によって行われました。池口氏は、仏教が持つイメージを現代の文脈に即した形で伝えるため、様々な団体とコラボレーションをしたフェスの開催や、お寺をテーマにしたアイドルグループのプロデュース、3Dプリンターやドローンを取り入れたイベント等を次々と考案・実践し、新たなコミュニティを創造することで、メディアを含め世間の注目を集めてこられました。これからを生きる若い世代に日本の歴史に深く関係してきた仏教思想をいかに身近に感じてもらうかについて考え、いくつかの提案を示している先駆者の話に参加者は引き込まれていました。

講演後には、京都でしか体験できない魅力的な11の分科会、帰国報告会、地域理解研修等が行われ、参加者は事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換する会となりました。

■日程

第１日目 8月24日（土）	
13:00～13:30	開会式
13:30～13:45	記念撮影
13:45～14:45	基調講演
15:00～18:00	分科会
19:00～20:30	懇親会
第２日目 8月25日（日）	
9:00	開場
9:30～11:00	帰国報告会
11:00～11:30	閉会式
11:30～	地域理解研修（オプショナル）

基調講演をする浄土宗龍岸寺住職の池口龍法氏

分科会E 友禅染「職人の挑戦と技術改革 京友禅」

分科会J 京都市「京都におけるSDGsとは？」

■分科会

（１）伝統の再発見～グローバル社会だから見えるもの～	
A	お香　松栄堂「記憶の玉手箱を開く香の力」
B	和菓子作り「五感を使って味わう　甘い体験」
C	ふろしき「奥ゆかしく包むコツ　～ふろしき体験～」
D	外国人から見た日本（京都）「外国人から見た茶葉と日本文化の世界」
E	友禅染「職人の挑戦と技術改革 京友禅」
（２）伝統の新たな挑戦～「現代」と共生するために～	
F	龍岸寺「新しいお寺のかたち」
G	仏像製作体験「伝統と革新　～蓮華豆皿とガチャ仏さま～」
H	伏見酒蔵　月桂冠大倉記念館見学　「豊かな水脈が育むまち伏見」
（３）伝統と生きる京都～これからの地域づくりを考える～	
I	海上自衛隊「国防と国際交流の今昔」
J	京都市「京都における SDGs とは？」
K	町おこし協力隊「京町家を探索しよう！」

【IYEOの活動】SIGAブルネイ／SWYAA国際大会ロシア

SSEAYPインターナショナル　第31回総会（SIGA）ブルネイ

「東南アジア青年の船」事業（SSEAYP）の参加11か国では、IYEOと同様に活動団体を組織し、SSEAYPに参加することで得られた友情の永続・発展を図るとともに、国際交流活動や社会貢献活動を行っています。年に1回、各国持ち回りでSIGA（SI総会）が開催されています。

第31回総会は2019年4月26日（金）～29日（月）に"Reunite, Reignite"「再会・再燃」というテーマのもと、ブルネイ・バンダルスリブガワンにて行われ、166名が参加しました。

歓迎夕食会にて挨拶するMajor General (Rtd) Dato Paduka Seri Haji Aminuddin Ihsan bin Pehin Orang Kaya Saiful Mulok Dato Seri Paduka Haji Abidin文化青年スポーツ大臣

一村一品運動を視察し、バージンココナッツオイルの製造場所を訪れ、工場や製作過程等を見学する

社会貢献活動で障がいのある若者たちと交流する

SWYAAインターナショナル　第13回国際大会（SWYAAGA）ロシア

「世界青年の船」事業（SWY）の参加青年が事業で培われた精神の継続を目的としてSWYAA (SWY Alumni Association) Internationalを設立しています。正式加盟国29か国、準加盟国6か国が登録し、非加盟の関係国と合わせて65か国が連携して各国で社会活動を行っています。年に1回、活動が活発な国でSWYAAGA（SWYAA国際大会）が開催されています。

第13回国際大会は2019年8月31日（土）～9月5日（木）ロシアのモスクワで開催され、世界20か国から114名が参加しました。各国で実施されている事後活動についての情報交換をする「事後活動協議会」が行われました。

【IYEOの活動】中国派遣団同窓会、日韓交流連絡会議

中国派遣団同窓会

1979年度に始まった「日本・中国青年親善交流事業」に参加した青年により構成されています。1999年3月に京都で設立総会が開催され、IYEO内の組織として中国派遣団同窓会が発足しました。2年前の派遣団が幹事役となって年に一度の総会を開催し、中国青年の訪日時には、都内視察の同行や地方プログラムの受入などに積極的に取り組んでいます。

2019年度の総会は、2020年1月12日（日）～13日（月・祝）神奈川県で開催され、全国から39名が集いました。歴史ある横浜市開港記念会館で実施した総会の中で、中国派遣団同窓会の未来について話し合うワークショップを行い、多世代が入り混じって交流することができました。

中国派遣団同窓会の未来について考えるワークショップ

2019年度総会の主な内容

同窓会長挨拶 幹事団長挨拶 IYEO挨拶	竹林義久団長（第37団） 松田敏明団長（第39団） 本田温子副会長
ワークショップ	中国派遣団の魅力について
	ディスカッション Part 1：自己紹介、印象に残っていること Part 2：事後活動で行っていること Part 3：同窓会に期待すること、今すぐできること
第41団中国派遣団報告	視察先や意見交換会の状況、ホームステイの体験等を発表
会則について	会則案を提示し、制定を目指す。施行までの一連の作業は会則起草委員に一任
役員について	同窓会運営を活性化させるため、各種役員の立候補を募る

日韓交流連絡会議

「日本・韓国青年親善交流事業」に参加した青年たちが、事業で得た日韓のきずなを再確認し、培った経験と国際感覚をいかし、日韓交流ネットワークを構築することを目的としています。2003年に有志が集まり、韓国ソウル市で「日本・韓国青年親善交流事業参加青年予備連絡会議」を開催し、日韓のネットワークを構築するための会議が実現可能なことを確信しました。2004年度から名称を「日韓交流連絡会議」とし、IYEOの主催事業となりました。本会議によるネットワークを活用し、日韓友好や社会貢献に寄与しています。

2019年度の会議は、2020年2月22日（土）～23日（日）、東京で開催され、54名が参加しました。

2019年度のプログラム

2020年2月22日（土）	
9:30	開会式
10:00	アイスブレイク
11:20	施設説明
11:30	荷物搬入、昼食
13:00	Working session（各コース別）
18:00	懇親会
2020年2月23日（日）	
9:00	今年度日韓派遣参加者による発表
9:20	Working session 共有
10:00	共同制作
11:20	閉会式
11:30	今後の連絡会議について
12:00	解散

内閣府青年国際交流事業

くわしくはこちら URL: https://www.cao.go.jp/koryu/

内閣府青年国際交流 検索

内閣府青年国際交流事業 事後活動ニュース FY2019

発 行 日：2020年2月28日
発　　行：内閣府青年国際交流担当室
〒100-8914 千代田区永田町1-6-1 中央合同庁舎8号館8階
TEL：03-6257-1434 FAX：03-3581-1609 URL：https://www.cao.go.jp/koryu/
編　　集：一般財団法人青少年国際交流推進センター　(Center for International Youth Exchange) URL: http://www.centerye.org/
編集協力：日本青年国際交流機構　International Youth Exchange Organization of Japan（IYEO）URL: https://www.iyeo.or.jp/ja/